

Title	狗河とパールバックとダマスクス
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.107(279)- 122(294)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 狗河とバールベックとダマスクス

筆者は八箇月間賜暇を得て、昨年四月中旬東京を出發して、シベリヤ經由、歐羅巴に再遊した。百日間イギリスに滞在の後、オランダ、ベルギーを経て、フランスに約廿日間を送り、九月三日マルセイユ解纜、四十日間の近東旅行に上程した。この近東旅行は、トーマス・クック會社の計畫にかゝり、先づ最初の二週間をナポリ、アテネ、コンスタンチノブル、スミルナ、ローヅ嶋、メッシナ、ベイルート間の巡航に充つる。ベイルートに上陸してから、シリア、パレスチナ——ホーリーランド『聖地』とエジプトとの巡遊に約廿日間を充て、その餘の五日間をアレクサンドリア、マルセイユ間の歸航に費すクックの年中行事の一つである。

左の小稿は筆者の日記を旅行記體に補綴したも

の中から、シリヤに關する分を抜載したものである。固より學術雜誌に掲載する考で、執筆したものでないから、記述の様式は勿論のこと、その用語にも、自から専門的でないものが少なくないことと思ふ。建築に關する用語に於て、殊にさうであらう。若し大方の叱正を得ば、筆者の幸福これに過ぐるものはない。

篇中に見はるる同行者は、イギリス國ウースター州のチャールス・ナイト氏夫妻である。吾等が『聖地』に上陸したのは、恰もアラビヤ人と猶太人との大衝突直後のことで、シリヤでは左程でなかつたが、パレスチナでは未だ戒嚴令が布かれてゐたのみならず、兩人種間の殺傷沙汰は同國の各地に傳へられて、何となく物情恟々たる際であつた。

要所々々には、憲兵(らしい者)や警官がもの／＼しく警戒し、各地のホテルの相客は、大部分イギリス及びフランスの將校、下士であつた。この間を巡歴する筆者が、謂はゞ一種の冒險旅行を無事遂行し得たのは、偏へに英國人の同行者があつたお蔭であらねばならぬ。茲に特記して、ナイト君夫妻に敬謝の意を表する。

## 一

吾等三人は九月十七日ベイルート上陸。グランドホテル・オリエントに投宿したのは、未だ朝の十一時前。ホテルは波止場に近く、二階のバルコニーから、海が見晴らさるる絶好の位地を占めてゐる。ベイルートは人口十四五萬を數へ、小麥、橄欖油、生糸、綿花、胡麻等を輸出する。街路は狹隘だが、兎に角シリア第一の物産集配地として、商業はなか／＼に活潑だ。此處からダマスクスまで汽車、ダマスクスから汽車か、又は鋪裝道に自動車を利用すれば、シリア、パレスチナの重要都市に通ふことが出來、一方エヂプトとの間にも、

此處を起點として、鐵道が通じてゐる。それから、海路もハイファ、ジャッファ並にエヂプトの諸港を通じて、マルセイユに行くことが出来る。シリヤ一圓を委任統治するフランスの統治長官も此處に駐在してゐる。又英米佛殊に米國人の經營に懸るミッション・スクールが何十とある。一八六六年米國人が建てた大學もある。それは非宗派的で、アラビヤ文學、數學、近代語、商業、醫學、その他各般の自然科學を教へてゐると云ふことだ。

吾等はホテルで身體を洗ひ、十二時半に午餐を濟まして休憩してゐると、やがて、ドラゴマン(ガイド)がやつて來た。このガイドはゼルサレムに住むアラビア人で、土耳其帽に普通の洋裝をした風采も立派な四十男である。ベイルートの米國學校で教育を受けたと云ふので、英語も明瞭で、マア正則の方だ。彼は僕に向つて、先刻この地で、馬を買ひに來たと云ふ三人の日本紳士に會つたと云ふ。多分馬政局の官吏がアラビヤ馬の買出しに來たのであらう。僕は空谷に聳音を聽くの思ひをした。三時半自動車を仕立てて、ドッグ・リヴァーに

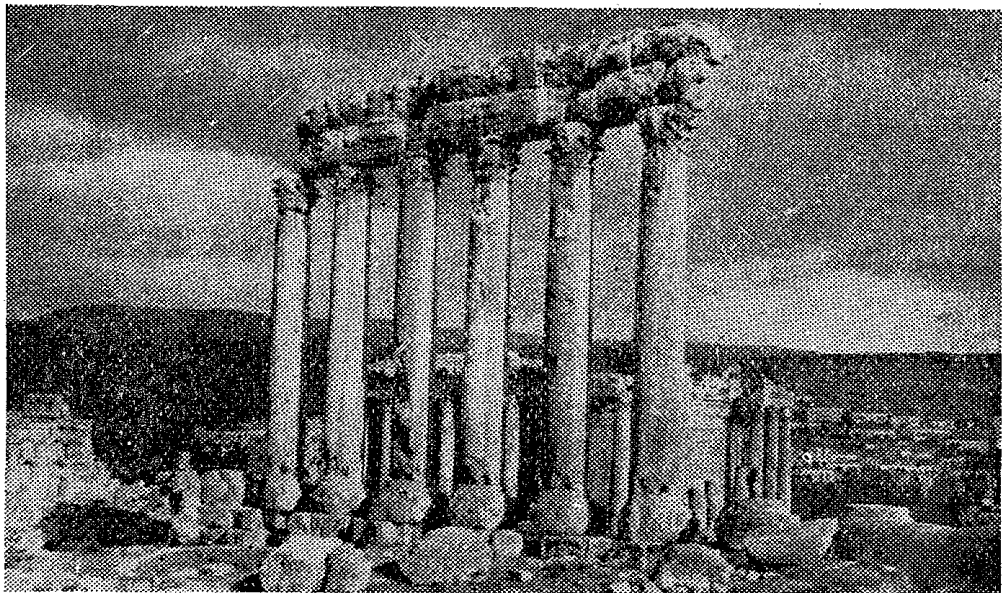
向つた。喧騒な市街をぬけると、一路坦々自動車は微かに雪を載いたレバノン山を目懸けて走る。

路の両側には桑畑が多く、バナナやオリヅの樹も繁つてゐる。群羊を率ゐる、長衣に白いタルバンのアラビヤ人の悠悠たる歩き振りも、原始的風致を加える。四十分でドッグ・リヴァーに著した。

トルコ語の nahr el-keib 即ちドッグ・リヴァーは、レバノン山脈に續く Mount Sonhîn に源を發し、崎嶇たる山間を流れて、ベイルートの北七哩の邊で、海に注ぐ左ほご大きくない河である。この河の名の語源は不明だが、それに就て、二個の面白い傳説がある。何

でも神話時代に、狼の怪物が、或神さまか、悪魔かの手で、この河口に鎖で繋がれてゐた。ところが、

或日恐ろしい巨濤がこの海岸を襲ふたので、件の怪物は鎖を切つて逃げようと荒れ狂ひ、その吼える聲がキプロスまで聴えたと言ふのである。他にもつと世間に熟知せられた話がある。往昔、此處の懸崖の絶頂なる臺石の上に、巨大なる狗の像が立つてゐた。風の強い日には、その廣くあけた口頭から、奇妙な唸り聲が聴えた。その唸り聲は、久しくアラビヤ人の間に恐怖の的となつてゐた。ところが、彼等の中から勇者が飛び出して、恐ろしい狗の像を攻撃して、遂にこれを海中に投げ込んだと云ふのである。恐らくそれは、アッシリヤ人の製作に懸る羽のある牡牛であつたと思はるる。一六九七年英國の



バールベックの廢墟(一)

Nahr Keib 河に達する。その河の名は、この邊の土人が崇拜し、且その神託を受けたと言はるる狗

か狼かの偶像に因んでゐる。その獸の像は四足を上に向けて海に沈んでゐるので、今も尙旅人に見せることが出来る。尤もそれは胴體ばかりだ。と云ふのは、その神秘的獸の頭はこれを打ち缺いで、ヴェニスに運び去られたからである』云々と叙してゐる。今も尙この河に架した橋際から、五十ヤードの邊に『狗』と稱する一個の岩があると云ふことだ。

ドッグ・リヴァーが海に注ぐこの邊は凡て斷崖であるが、新道は海に沿ふて切り開かれてゐる。橋を下瞰する斷崖百呎ばかり上に、マーカス・オーレリアスの治世に建造せられたローマの舊道の遺跡がある。その遺跡に沿ふて、巨大な屏風のやうに連つた絶壁の側面に、エジプト人やアッシリヤ人が刻した數個の肖像や文字が遺されてゐる。前者は西暦紀元前一三〇〇―一二三四年に君臨したエジプト王セソストリス若くはラメセス二世の遠征の紀念であらう。後者は紀元前九世紀から七世紀の間に於けるアッシリヤ王シャルマネサー二世及びエッサーハドンの征戰の記録であらう。尙橋際に、一

八六〇年佛國皇帝ナポレオン三世の遣はした遠征軍の紀念碑も立つてゐる。吾等はガイドを先頭に、急峻な坂路を攀ぢ登る。第一に右手を擧げたアッシリヤ國王の岩面に刻んだ像が見へる。その次に大部分磨滅して、頭部だけが残るこれもアッシリヤ王の刻像が展開する。多分シャルマネサー二世の彫像であらう。息を切つて、尙登つて行くと、ラテンやギリシャの刻字も見はる。その次ぎに、日輪の神、☉に捧げられたラメセス二世の壁像がある。その次なるエッサーハドンの浮彫には、その頭邊に惑星と、その周圍に楔形文字が刻んである。最上の岩面にはテーベの神アモンの前に禮拜する他のエジプト王の像があり、それに近く、最も好く保存せられたアッシリヤの刻字がある。斷崖から下りて、橋際の茶店で小憩し、五時過同じ途を通つて、バイルトに歸つた。久し振りに入浴して、今夜ホテルのバルコニーで晚餐する。恰も陰曆十五日に當り、望月は隈なく聖ジョージ灣を照らして、佳い眺めだ。軒を列べる各ホテルから絃歌の聲が熾んに聽へて、直隣のホテルではダンスが催

されると云ふことであつた。ナイト君は、これも  
茲に上陸した英國出身のバグダアド石油會社員に  
誘はれて、他のホテルに遊びに行つて、夜晩く歸  
つて來た。

九月十八日。五時廿分起床。匆々朝食。七時少  
し前停車場著。直に發車。ベイルートの郊外から、  
漸次汽車は爪先上りで、レバノン山脈にかかる。  
行手には、遙にレバノンが嵯峨たる群峯を抜いて

天に沖し、松林茂る崎嶇たる丘々谷々には、低い白  
聖の禮拜堂チャペルや民家が三々伍々部落を成してゐる。

汽車は羊腸たる山道を縫ふて迂回すること多時、  
いよ／＼最も高い鐵路に達すれば、左手に地中海  
が藍よりも青く展開せられ、一方には微かに白雲  
を載いたヘルモン山（レバノン山脈の一）が見へて  
來る。この邊の交叉點で偶然角野君に邂逅した。

アンゴル號は今日午後まで碇泊するので、一寸遊  
びに來たのだと、元氣に語つてゐた。一等客には  
歐米人殊にフランス人が多い。多くはこの邊の山  
間に避暑する客だ。自分と向ひ合つた何れも風采  
の立派な中年の夫婦は、カイロで商業を營むフラ

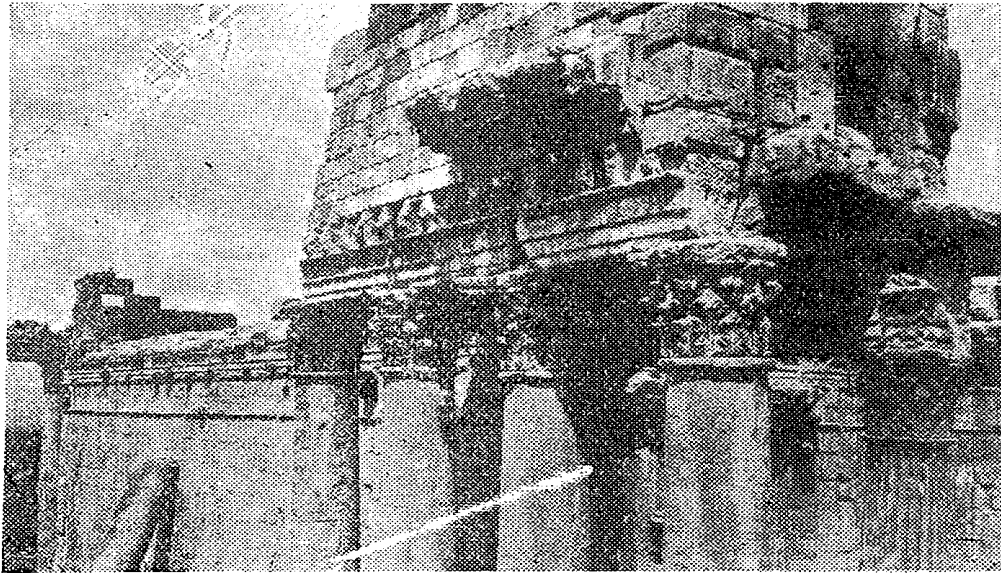
ンス人だ。日本人と取引すると云ふので、親しげ  
に僕に英語で話しかけては、日本の事を聞くので  
あつた。頓て汽車は山道から下りて、レバノン山  
と、その反對側に連なるアンチ・レバノン山との  
谷間なる平野に出でた。この平野の重要驛ライラッ  
クで乗換へて、十二時過バールベックに着いた。

## 二（上）

バールベックはアンチレバノンの山脚に立つ小  
さな町だ。人口約五千二百人で、基督教徒と、回  
教徒とが半々である。驛から歩いて十分位で町に  
行けるが、吾等は自動車で、ホテルヴィラ・カウア  
ムに荷物を卸した。一時半食堂に出ると、フラン  
ス人の男女巡禮の一團二三十人が、中央の食卓を  
圍んで午餐中だ。黒髭の長い牧師と見ゆる先達が  
起立して、何か提議すると、賛成々々の拍子が熾  
んに起つて、賑やかなことだ。食後少時午睡。三  
時半徒歩してバールベックの古跡を訪ふた。ホテ  
ルの前庭から、松や楓の綠滴るアヴェニューを通つ  
て、左に曲ると、清い小河に沿ふた大道に出る。

面をヴェールしたアラビヤ婦人が洗濯をしてゐる傍に、男の子等が魚をすくつてゐる。その大道から、だら／＼坂を登ると、頓て古跡に達する。

パールベックは畢竟この古跡あるを以て、世界に名高いのだ。パールベックの名稱の起原は、明かでないが、Baal 神に因んで命名せられたであらうことは、想像することが出来る。舊約のアブラハムがこの道を通つたことは、可成確かであるが、この町が、ダマスクスとタイル間に於ける隙商の中間の樞區であつたことも、多少の證據が遺つてゐる。一代の榮華を極めたソロモン王が、パール神の爲めに神殿を茲に建てたと云ふことも、幾らかの徵證が存する。降つてギリシャ時代に入ると、事蹟が餘程明



パールベックの廢墟(二)

瞭になつて來る。ギリシャ人はパール神に代るにその崇拜した日輪の神 Helios の名に因んで、此地をヘリオポリスと呼んだ。紀元一世紀に來たローマ人も亦、ギリシャ人と均しく、ジュピターやマーキュリーやヴィナスを崇拜した。是等の神に捧げられた神殿の建築は二世紀のアントニヌス・ピウス帝の時に起工せられ、カラカラ帝の治世に竣工した。コンスタンチン大帝の時ヴィナスの禮拜を止め、テオドシウス帝の時、全く基督教の教會に改築して了つた。紀元六三四年アラビヤ人がダマスクスを征服した後、彼等はパールベックを占領し、是等の殿堂をその要塞に充てた。爾後地震やトルコ人や蒙古人の爲、再三の破壊に逢つたが、兎に角この古都が多少の遺趾を留めて、今日フランスの委任統治の下に、考古學者をして安んじて、

研究せしむることを得るのは、世界文化の爲、欣ぶべき事である。

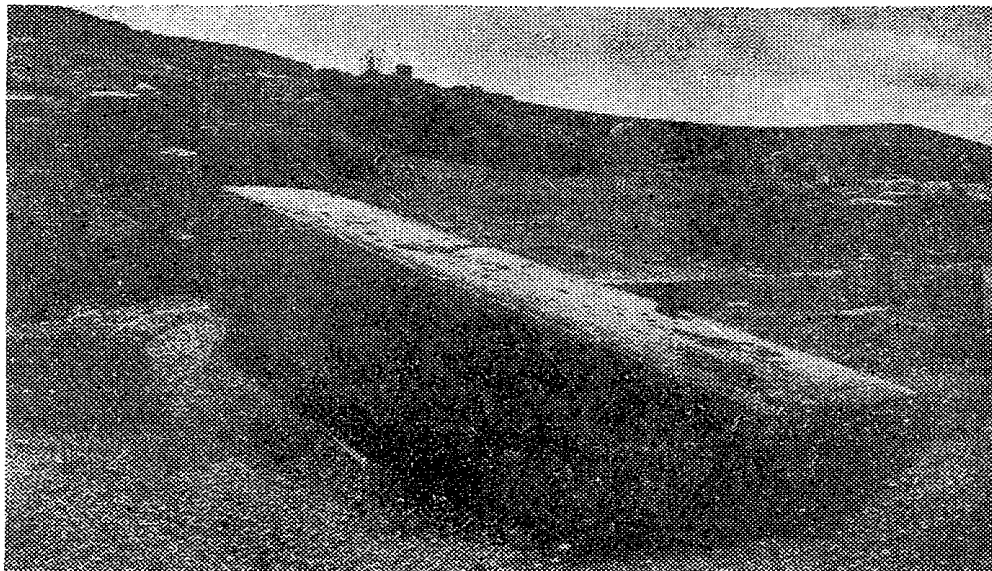
パールベックの廢墟は、その廣袤長さ四百ヤード幅三百ヤード。その入口は一九〇五年に改築せられたものである。橄欖樹など茂る美しい前庭を通つて、可成り高い石段を昇る。この境内に、日の神に捧げられた大神殿と、ジュピターの爲に建てられた所謂『小神殿』との遺趾がある。外にバックカス神の殿堂の遺趾も、向つて左の端に遺つてゐる。日の神の殿堂と、ジュピターの神殿とは、東西約八百呎、南北約四百呎のプラットフォームの上に立てられてゐたのである。是等ヘレニック的建築の中に、サラセン的城塔の遺物が混在して、著るしくその美觀を傷つけてゐるのが、惜しい。石段を登ると、前庭門がある。その兩側には塔が聳え、本來十二個の圓柱が並び立つてゐた柱廊であつた。其等の圓柱は礎石だけ今尙遺つてゐる。その礎にラテン語で刻した、皇帝アントニヌス・ピウス、母后ユリア・アウグスツスの安全の爲、元老院並にローマ軍營がこれをヘリオポリスの神々に捧ぐると

云ふ意味の由緒書がある。前庭門を通り抜けて小神殿の境内に入ると、六角形の廣庭があるが、その周圍には數基の露天高座が立つてゐる。その上で談話したり、休息したりすることが出来る。回教徒は是等の露天高座を堡壘に改造した。次に謂ゆる Court of the Altar に通る。この廣庭は長さ百五十ヤード幅百廿五ヤードあつて、その真中に、テオドシウス帝が基督教の教會を建ててゐた。この廣庭の周圍にも、以前は露天高座があつた趾がある。夫れから東端に四角なチャンバーがあるが、それに接して、發掘の際に看出された紀念品を藏した小博物館がある。聖壇の一部分は發掘せられて、今は廣庭の中央に立つて居る。教會の建物の幾分も、聖壇の向側に見ることが出来る。このローマ時代のバシリカの遺趾を通り抜くると、吾等は大神殿の廢墟に達する。本來長さ二百九十呎幅百六十呎の大神殿は、一種のパンテオンであつてその中には主としてジュピター神が祀られてあつたのである。この神殿は、元總計五十四の圓柱から成る列柱廊であつたのだが、今は唯だその中の



六個を遺してゐるに過ぎない。それでも、高さ六十呎の是等圓柱は、そのコリント式の柱頭キヤピタルとその飾壁フリイズや蛇腹コルニスや臺輪アピチトレツやが豊麗に飾られたアンタブラチュアアンタブラチュアによつて、往にし昔の壯觀を偲しのばしむるに足るものがある。以前は心なき土人が鉛の締金を獲んが爲、無殘にも圓柱を切り取るので、保營者を困らせたと云ふことである。

六個の圓柱から左に曲つて、吾等は頓てバッカスの神殿に達した。其處の地盤は大神殿等のそれよりも稍々低い。而して境内も、大神殿等の夫れに比べて遙に狭いが、そのコリント式の殿堂は最も好く保存せられて、シリヤを通じて、これに如く美



石切の外用壁のバールベック

が現存してゐる。高さ各々五十二呎半である。花模様キヤピタルの柱頭を冠した是等の圓柱の上にも亦、高雅な飾壁フリイズで裝飾せられたアンタブラチュアアンタブラチュアが載せられ、その又上には、いろ／＼の人物の半身像や、幾何學的デザインやを刻んだ巨大なる石塊が方形の山の如く冠せられて、アーチ形の軒を成してゐる。東方の階段に面して、八個と六個と二列の圓柱を見ることが出来る。その柱廊を通り抜くると、其處に素晴らしく大きな Door of the Temple がある。

その戸には、バッカス神を崇拜する、飲み騒ぐ婦人の群や、回教の魔神を豊富に刻み、又鳥や虫や草の葉なごも、一寸以内に細さく彫刻されて、その精巧驚くべ

觀はあるまい。吾等は東側から境内に入つた。以前列柱廊を成してゐた四十六個の圓柱の中、十九個

さものがあつた。又その楣石リントの下部に鷲の圖があるところから見ると、バールベックに對するエヂプト

の勢力が大きかつたことが窺はるる。前記の圓柱の内部に沿ふて、アラビヤ人が要塞に充てんが爲障壁を建ててゐるが、その北方の障壁の中央に、一八九八年ドイツの廢帝ウイリアムが此處を訪問した記念の書板タブラレットがある。カイザーはその所謂『東邦突進政策』を實現せしめんが爲、第十九世紀の末葉、二回に亘つて、近東に大旅行を試みたのだが、『聖地』の到る處に、彼の巨大なる足跡を印したのを見ることが出来る。これも、その一つだ。バッカス神の聖堂は、内陣の西端に遺つてゐる。バッカス神殿の南北にアラビヤ人の建てた塔がある。吾等はそれに上つて、一瞥したが、パールベックの廢墟がアテネのアクロポリスに比べて、境内は勿論狭いけれど、見渡す限り累々たる斷垣殘礎の山であつて、遙にその遺物の豊富であることを知ることが出来る。成程『世界七奇』の一に數へらるるも故なしとしない。

夫れから、吾等は北側のアラビヤ人の建設した地下道に入つて見ると、其處の地下室にはいろいろの商品を賣つてゐる。南側にも地下道がある

さうだが、これが縦覽を割愛した。

この廢墟の外壁は、實に驚歎に値する巨石を積み重ねたものだ。殊にその西北側には、『神聖なる城壁』の遺趾が、殆ど昔時の儘に遺つてゐる。その礎石は驚くべし、平均三百廿四立方呎の巨石だ。従つて、その礎石の上に積み重ねられた石も、平均の  $3 \times 4 \times 5$  呎の大きさだ。是等の巨石は、その隙間にナイフをすら突き込むことの出来ない程、それほど精密に、ローマ流の謂ゆる三重體式トリプルに積まれてゐる。ケルマン博士は、『是等の石塊一つで、間口奥行共に六十呎高さ四十呎、壁の厚さ一呎の家を建つるに足る』と言つてゐる。『神聖なる城壁』の礎石を利用すれば、優に近代式ビルディングが建てらるる勘定になる。是等の城壁が神殿より後に建てられたことは、下述の記事で明白になる。吾等はこの西北側の城壁に上つて、眺望した。パールベックの町から、アンチ・レバノンの山々が見晴らされ、直眼下の綠林から、冷しい風が吹いて、神氣頓に爽快を覺えた。間もなく城壁を下りて、此處を辭した。

## 二 (下)

アクロポリスから東方三百ヤードの處に、ヴィナスの殿堂が立つてゐる。その外觀は立派だが、その内陣を見ると、ローマの建築の衰頹時代を語る徵證が見へぬでもない。勿論その規模も、前記の神殿に比ぶべくもない。この神殿は勿論本來ヴィナスに献せられたものだが、後には聖バーバラに捧げられたことは、その内壁に十字架の保存せられてゐるのを見ても、明白だ。この聖バーバラの事ではないが、バルベック地方の人々が、昔から傳はるローマの神々の崇拜を捨てて、基督教に歸依するに至つた過渡時代の殉道者に關した一悲話がある。それは紀元一一四年ヘリオポリスで殺された St. Eudoxia の事だ。

ユードキシアはサマリアに産れた當代に於ける最も美しい最も魅力ある女性の一人であつた。一度この婦人から秋波を向けられたら、いかな男も忽ち墮落せざるを得ないのであつた。凡そ評判女として、彼女の如く世間を騒がせ、彼女の如く當時

の社會に害毒を流したものは稀であつた。彼女がその淪落した職業から儲けた金銭は莫大な額であつた。或晩彼女が基督教徒の家に隣つた室にあつて、悔ひ改めずして死んだ靈魂が永久の苛責を受くる場面が描かれつつある畫の噺を聞かされた。ユードキシアは戰慄した。而してその翌朝直ちに、眞の信仰を彼女に教ゆべき坊さんの許に趨いた。斯くて一週間説教を聽いた後、眞の懺悔者は忽ち見神の境に達して、天國に於いて、彼女の爲に留保せられた地位を見出したのであつた。洗禮を受けた後、ユードキシアは隱家に遁れた。ところが、豫ねて彼女に馴れ染めてゐたさる若い男が、彼女の懺悔を愠つて、身に法服を纏ひ、坊さんの風を装つて、これを連れ出さうと決心した。今は行ひ澄ましたユードキシアは、その策略の裏をかいて、件の遊治郎は却つて、彼女の手に殺されて、その足許に倒れたのであつた。併し彼女の熱心なる禱の力で、若い男は息を吹き歸し、彼も亦その放埒な生活から懺悔の生活に入つたのであつた。ところが、廣く人々に愛せられてゐたユードキ

シアは、彼女の行つた多くの奇蹟や親切なる行爲に依つて、この地方の暴動を惹起すべき恐れがあつたので、ローマの總督は私かに彼女の首を切つて了つた。

話は思はず岐路に這入つたが、ヴィナスの殿堂を辭して、吾等はガイドに案内せられて唯ある清洒な家の前に達した。フランスの考古學者で、此地の發掘事業に親しくたづねはる Geo. E. Shamich 博士の私宅である。請ぜらるる儘、内に通ると、銀髪のお博士が出て来て、流暢な英語で、いろいろと話しかける。その姪に當る妙齡の美しいお嬢さんが、茶菓をすすむる。お博士は發掘したいいろいろの遺物を棚から取り出して、土産に買はぬかと勧むる。ヴィナスやアポロやその他古英雄の彫像などもある。併しいづれも、數十磅若くは百磅以上の高價で、咽喉から手のでるやうに欲しいが、財囊の輕い僕には手の出しようがない。併し折角此處まで来て、一個の紀念品なしに去るのも残念だと思つて、その中で最低價格なるヒットایت帝國時代のさる國王の小像と云ふのを購つた。この像

は胴體は失はれて、單に頭部だけしかないものでそれで價が安いのである。別室では、フランスの絹織物や、ペルシャの絨毯などを賣つてゐる。考古學者も食はねばならぬので、片手間に骨董屋と呉服屋を營んでゐる譯だ。學者にしてはお世辭があり過ぎるのも、其故であらう。ナイト夫人はいろいろ絹織物を勧められたけれど、どうも買はなかつた。頓て辭して、六時半頃ホテルに歸つた。

晚餐後、二階の東端なる自室で休憩する。外では、十六日の月は隈なく冴えて、ホテルから少し離れた叢から、唧々たる秋虫のすだく音が聽ゆる。座ろに旅愁が催して來る。ソロモンの榮花も今や夢なれやバーベックの野に秋虫ぞ鳴く。仲鷹の昔ぞ偲ぶ己が身には、くまなき月も曇らんとぞする。恐らく歌になつては居るまいけれど、僕の直感を卅一文字に現はしたまでだ。今日は甚く疲勞したので、例よりも早く床に就いた。

九月十九日。午前には日程がないので、ホテルで聖書や猶太史など濫讀した。午後二時半ホテルを辭して、自動車で停車場に向ふ途中、有名なる

石切場を見た。それは町と停車場との半ばごろから一寸往還を左に曲つた處にある。此處に素晴らしく大い長方形の石塊があるが、それがボールベツクの外壁用に切られたものだ云ふことは、その大さの同じい點からも、これを察知することが出来る。昔時のローマ人は勿論奴隷の勞働に依て是等の重い物を動かしたのだが、何でも凡ての運搬人足の間均等に重量を分つことの出来る一種の器械と、その利用方法とを知つてゐたと云ふことは、近代科學の證明する所である。

## 三

吾等がボールベツクの停車場に着いたのは、三時前であつた。驛には多くのフランス駐屯兵を見受けた。その多くはアルサス訛りのフランス語を語つてゐた。バアで水など飲んで待合はせてゐる中、一時間以上遅れて、汽車は四時過ぎ漸く到着した。再びライラックで乗換へて、ダマスクスに向ふ。汽車は碯確なるアンチレバノンの谷間を辿つて進む。車内には未だ電燈の装置がなく、石油ラ

ンプの照明だから、日が暮るゝと、僕には讀書の出来ないほど薄暗くて不愉快だ。それでも、ダマスクスから三つ四つ前の驛あたりから、夜目にも窓外の景色の佳いことが窺はれて来る。潺湲たる谷河の流れにも、驢に鞭つ牧童の罵聲にも、太古の響きがする。アブラハムやヤコブやマホメットの事等連りに聯想して見る。やがて汽車はかなり大きな一驛に着く。旅客の雑沓や、物賣り聲に、忽ち僕の夢想は破られて了つた。ダマスクスに着いたのである。恰度八時十五分頃であつた。直ちに馬車に乗つて、當市第一流のホテル・ヴィクトリアに投宿した。着後直ちに街路を隔てた向側の同ホテル附屬のレストランのヴェランダで晚餐。シリアの空は快く晴れて、群星が眞珠のやうに耀いてゐる。鉢植の棕櫚や芭蕉の葉陰を通して送る涼風は、一日の疲れを醫するに足る。茲でも、昨日のフランス人夫妻に會つた。十時臥床。ダマスクス人口約四十萬、シリアの首府である。恐らく世界最古の都市で、メンフィスや、ニネヴェや、バビロンに比しても古く、基督紀元前千九百

年、舊約のアブラハムが、『ダマスクスの Eliezer なる者』をその執事に傭つて、此處の道を通つたとき、この都市は既に著名であつたと、創世紀に見えてゐる。

吾等は九月二十日午前九時ドラゴマンに案内せられて、サラディン・モスク、博物館、バザル、聖ポール・ウィンドウ、ローマの古城壁

何れにもせよ、ダマスクスは古

來シリヤ及びアラビヤの大砂漠

に通ずる樞區であり、幾週日の

長旅に疲れた隊商が鬱散の一大

オーシスである。ダマスクスが

此の如く古來シリヤの大都市と

しての地位を確保し來つた所以

は、市内を貫通する Barada 河

の與ふる灌漑の便があるから

だ。ヘルモンの雪とバラダの水

とは、この古都市をして、熱帶

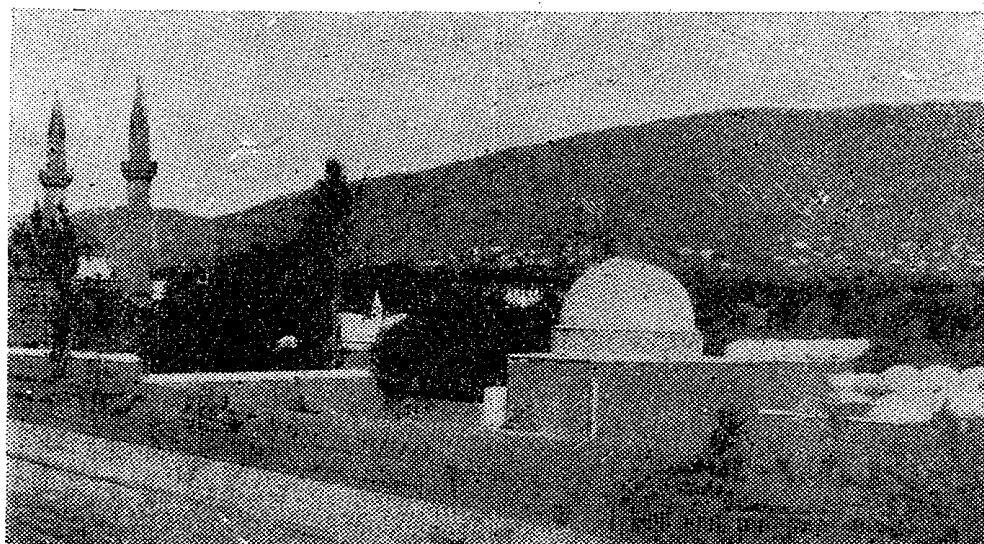
の植物を繁茂せしめ、市街に活

氣を吹込む天の配劑とも言へよ

う。併しダマスクスの沿革、そ

の古代歴史上に於ける變遷の跡を釋ぬることは、

本文の目的でないから、茲にこれを省く。



ダマスクス遠望

ばかりだ。バザルは相も變らず、不潔な人種がうよくして、その中の賣品にも欲しいと思つたも

と次々に見物したが、茲に特記すべきほどの印象は、殆ど残つてゐない。唯だサラディン・モスクが君府のサン・ソフィアのそれにも劣らない大伽藍で、その廣い床に敷め詰められた絨氈の（回々教國の各地から寄附せられたと云ふ）眞に華麗絢爛目を奪ふものがある事と、僕の見た古ローマ城壁の中で、此處のそれが、最も完全に、最も長距離に亘つて、保存せられてゐる事とが注意を惹いた。聖ポール・ウィンドウに就いては、美術眼のない僕には、何の説明だもすることは出来ない。博物館は通り抜けた

のはなかつた。それから、ユーロピアンクオーターには電車が通つてゐるが、自動車は殆ど見受けない。市街を往來する男女の多くはアラビヤ人で、歐米人は少ない。市街は頗る不潔で、一種の臭氣が鼻を衝く。東洋品を賣捌く或商店の工場で、ブロンズブロークや美術的箱物を製作する實地を視たが、その規模も大きくなく、近代式器械は殆ど全く利用せられざる、昔ながらの家庭工業に過ぎない。この商店で、ブロンズ製水注を紀念として買求め十二時半歸宿。

午餐後少時午睡。午後三時、恰も開會中であつた停車場側の博覽會を縦覽した。地方的の小規模なる博覽會に過ぎないが、絨氈、ブロンズブローク、絹織物、刀劍等の出品可成り多く、ダマスクスが近東地方に於ける物資の重要集散地たることを示すに餘りあるものであつた。

博覽會場を辭して、吾等はドラゴマンの案内する儘、市の南側に聳ゆる Salahiyeh の丘に上つた。僅か二十町餘の距離だが、馬車の馬はのろくと歩いて、三十分以上を費した。丘は赭禿のごみく

した山だが、流石にダマスクス市民の遊散場處だけあつて、頂上からの眺めは格別である。南方には、白雪皚々たるヘルモン山が高く聳へて、その裾野は薄く眞珠色に染め成され。東の平原には、Jebel Druze の支脈が、北東方に蜿蜒々と連つて、遙に糶糊と地平線上に消えてゐる。又北方には、アンチレバノン山脈の最東端に圓錐形の峯が聳へて、バルミラ(シリアの他の一古都)への路を案内するが如く見ゆる。眼下のバラダ河と數條の運河とによつて仕切られたダマスクスの市街の此處彼處には、回々教寺院の圓塔が、宛然ヘルメット帽子やうにむらがり立ち、中にも大きなモスクの端々には、ミラネット(一種の炎塔)が、巨大な筆を逆さに立てたやうに、天に沖してゐる。それからこゝんもりした緑の森や、熱帯植物の果樹園が、其等の寺院と町家との間に點綴してゐる。實に麗らかな長閑な眺めだ。懐ひは遠く、アブラハムがその家の子郎黨と、驢馬や駱駝の群れを率ゐる、シリアの曠野を彷徨した舊約時代に馳せざるを得ない。ナイト君は例の如く、破損しかつたカメラ

をいじくつてゐた。吾等は再びのろ／＼と馬車を  
驅りて、六時頃市に歸つた。

ホテル・ヴィクトリアの直隣に絨氈や絹織物を大  
仕掛に賣捌く商店がある。その商店で、紀念品と  
して、アラビヤ語のコーラン手寫本を購つた。決  
して珍本と云ふほどのものではないが、十九世紀  
初頭ごろの發行にかゝり、アラビヤ製の薄葉に手  
寫し、輪廓には少しばかり金泥の裝飾が施こされ  
てゐる。ナイト夫妻は絨氈や絹織物を求めた。八  
時昨日のやうにヴィクトリア・レストランのヴェラ  
ンダで晚餐。今日も疲勞したので間もなく就床。

九月二十一日。五時半起床。六時半朝食。七時半  
ドラゴマンに案内せられて、馬車で停車場に行く。  
八時の發車にはまだ間があるので、ダマスクス停  
車場の建物を一瞥した。洋式建築に少しばかりア  
ラビヤ風を加味したと云ふだけで、他奇とてはな  
い。汽車は定刻出發。八人定員の一等車には吾等三  
人だけだ。窓外は見渡す限り<sup>あかほけ</sup>赭禿の山で、殺風景  
だが、此處其處に駱駝の群れが、まばらな枯草の間  
を逍遙するのを見受くる。九月十月は近東地方の

無雨季節(夏季は勿論さうであらう)なので、汽車  
が南の方に走るに従つて、暑さは益々加はつて行  
く。生憎ロンドンの阿座上商會から貰つた扇子を  
ダマスクスに遺して來たので、暑熱は一入身にこ  
たへる。併しヘルモンの姿容は一層鮮やかに、そ  
の頂上の白雪は、涼しい風を右の窓から送るので、  
大に暑氣を緩和する。何れの驛でも、跣足で目ば  
かり光る黒い顔したアラビヤ人の子供が、桃、葡  
萄、バナナ、雜貨を售る聲が喧かしい。ナイト君が  
柘榴を何處かの驛で仕入れて來たので、多少喝さ  
を醫ることが出來た。二時間ばかりたつて、他  
の列車に乗り換へた。今度のは藤製の腰掛けだ。  
涼しくは見ゆるが、掛心地がよくない上に、満員  
の雜沓だ。土耳其帽を戴いた眼光の鋭い、大官ら  
しく見ゆるアラビヤ人は、車掌に命じて、他の客  
車に移つたので、少しく樂になつた。この邊到る  
處の驛で、白いタルバンに黒いトীগのアラビヤ  
労働者の群がガヤ／＼と騒いでゐるのは、汽車に  
乗る爲ばかりでなく、示威運動でもしてゐるもの  
らしい。兎に角喧囂この上ない。頓で正午になつ



たので、ドラゴマンがホテルから用意して来た辨當を開く。牛肉、鶏肉、半熟玉子、パン、チーズに、葡萄と桃まで副へてあつて、その分量も日本の汽車辨當の三倍はある。なか／＼の御馳走だ。おまけに、彼が近東地方に特有なる大きな土瓶に詰めて来た清水も、時にとつての甘露だ。

少時まごろみた後、目を覺ませば、汽車は高原から谿をうねりうねつて下つて行く。その谿川に沿ふた草原には、點々アラビヤ人の天幕生活を見ることが出来る。天幕と云つても、近代的學生の

キャンプに用ゐるやうな完備したものでなく、キャンプの裾の方には、蔽ひがないから、横日の場合には、灼熱の日光が遠慮なく射し込むのである。

それでも彼等は頓著なく、その中に一家擧つて熟睡してゐる。Semakh に近づいた頃、パスポートの検査があり、續いて税關の検査が行はれた。同行者がイギリス人だからでもあらう、兩度とも事なく濟んだ。三時四十分セマアク著。直ちに自動車で、タイベリアスに向ふ(以下人名地名とも、バレスチ一圓の官用語であるイギリス式發音に従

ふ)。セマアクの驛を通り抜くると、右手に大きな湖が展開して来る。聖書に名高いガリレ海即ちダイベリアス湖だ。久しく水と雨とに渴した吾等にとつては、實に天の美祿だ。今日の暑い／＼旅行の疲勞も忽ち醫せられて、宛も早天に驟雨が一過した快よさだ。間もなく、これも聖書に散見するジョルダン河の水源に架した鐵橋を渡つて、四時半タイベリアス市のタイベリアス・ホテルに著いた。

## 占部百太郎